春夜宴二桃李園一序

李白

作者

李白

七〇一年～七六二年。字は太白。号は青蓮。盛唐の詩人。自由奔放な詩風で、道教を信奉し「詩仙」と呼ばれた。大胆な発想と自由な表現で、盛唐を代表する。隴西成紀（甘粛省天水県）の人とも、山東（山東省）の人ともいわれ、また西域の出身とする説などもあるが、蜀（四川省）で生まれ育ったとするのが有力である。父は、西域との通商をしていた大商人だったと考えられている。十五歳の頃から剣術を学び、詩文も制作するようになっていた。二十歳の頃には蘇頲に認められてもいる。早くから任侠と酒と美女を愛し、各地を放浪した。二十七歳の頃、安陸（湖北省）で結婚したが、三十五歳の頃太原（山西省）に旅行、任城（山東省）に住んで新たに結婚して一男一女をもうけた。後、江南に旅立ち、会稽（浙江省）で道士の呉筠と知り合って、仙術の修行をするが、呉筠が玄宗皇帝に召されて長安にのぼると、呉筠の推薦によって、天宝元（七四二）年、李白も都に出た。玄宗に仕えて翰林院供奉となり、賀知章から「天上の謫仙人（天上から人間の世に流された仙人）」と評されたりした。天宝三（七四四）年、あまりにも豪放不羈な性格だったために長安を追放され、河南・山東の地を放浪し、杜甫や高適らと交流した。天宝十三（七五四）年、宣城（安徽省）に住んだが、翌年、安禄山の乱が起こり、玄宗の第十六皇子の永王璘の安禄山討伐軍に参加する。しかし永王の行動が兄粛宗皇帝から反乱行為と断定され誅殺されると、李白も罪を問われて夜郎（貴州省）に流された。途中、巫山（四川省）付近で赦免され、長江を下って江蘇省の辺りを転々とし、宝応元（七六二）年、当塗（安徽省）県令李陽冰の家で没した。天才的で卓越した想像力と自由奔放な表現力、大胆で豪放な構想など、全ての面で盛唐の気風を体現した詩人なので、杜甫を「詩聖」と呼ぶのに対して「詩仙」と呼ばれるのである。杜甫は、「春日憶二李白一」詩のなかで、「白也詩無レ敵、飄然思不レ群」と称えている。ことに絶句形式に才能を輝かせ、律詩を得意とした杜甫と並べて「李絶杜律」と評される。「李太白集」三十巻がある。

出典

古文真宝

「古文真宝」は、前集と後集と各十巻から成り、前集には漢代から宋代までの著名な古詩二百十七首を収め、後集には戦国末の屈原から宋代までの文人三十三名の文章六十七編を、辞・賦・説・解・序・記・箴・銘・文・頌・伝・碑・弁・表・原・論・書の十七類に分類して収録している。本書の特徴は、「文章軌範」が唐・宋の文章を中心とするのに対して、戦国時代から宋に至るまでの名文を広く収載し、しかも文体の分類があるところから表

現形態の変化を知るのに便利なところにある。

本書の編集は永陽（安徽省滁州市）の黄堅によるものとされるが、宋の末年の人と推定されるだけでその事跡などは未詳。本書の成立年代も、おおよそ宋末元初の頃で、古文尊重の気運が盛んになった時代に古文学習のために編集されたものと考えられている。中国では元・明の時代に読まれ、我が国には室町時代初期に伝えられて、五山の学僧に愛読された。また、近世から明治にかけて、教養のための必読書とされた。本文は巻三序類からとった。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　古文真宝（後集）」（星川清孝著）によった。

参考文献

❊ **教師用**

「古文真宝（後集）」（新釈漢文大系）星川清孝　明治書院　昭三十八

「古文真宝」（中国の古典）佐藤保他　学習研究社　昭五十九

「研究資料漢文学６　文」渡辺英喜・田部井文雄・吉崎一衛　明治書院　平五

「李白と杜甫の事典」向嶋成美　大修館書店　令和元

❊ **生徒用**

「漢文名作選４　文章」巨勢進・向嶋成美　大修館書店　昭五十九

「古文真宝」（新書漢文大系）星川清孝　明治書院　平十四

「漢文塾　漢字文化の魅力　上」田部井文雄　明治書院　平二十二

図版解説　**〈桃李園図屏風〉**

静嘉堂文庫美術館蔵。明治二十八（一八九五）作。六曲一双屏風。絹本著色。川端玉章（一八四二―一九一三）筆。

⇩P160

主題

人生は短くはかない。折よく集まったのは身内の親しい者たちで、いずれも作詩に優れている。それに時は陽春の好夜である。大いに飲み、大いに詩を作って楽しもうではないか。

訓読と現代語訳

①夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。②而して浮生は夢のごとし。③歓を為すこと幾何ぞ。④古人燭を秉りて夜遊ぶ、良に以有るなり。⑤況んや陽春我を召くに煙景を以てし、大塊我に仮すに文章を以てするをや。⑥桃李の芳園に会して、天倫の楽事を序す。⑦群季の俊秀は、皆恵連たり。⑧吾人の詠歌は、独り康楽に慚づ。⑨幽賞未だ已まず、高談転た清し。⑩瓊筵を開きて以て華に坐し、羽觴を飛ばして月に酔ふ。⑪佳作有らずんば、何ぞ雅懐を伸べん。⑫如し詩成らずんば、罰は金谷の酒数に依らん。

①そもそも天地というものは、万物を迎え入れる旅館のようなものであり、時間の流れというものは、永遠の旅人のようなものである。②ところがはかない人生はまるで夢のようである。③喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。④（だから）昔の人がともしびを持って夜まで遊んだのも、実にもっともなことである。⑤ましてやうららかな春がかすみたなびく春景色で自分たちを招き寄せ、万物の創造者が自分たちに文章を作る才能を貸し与えてくれるからには、なおさら（楽しく遊ばないではいられないの）である。⑥桃や李が美しく咲きほこる花園に集まって、肉親の間の楽しみを繰り広げる。⑦大勢の優れた年少者たちは、皆、昔の謝恵連のよう（に詩がうまい）。⑧（ところが）私の詩だけはまずくて、（恵連の族兄の）謝霊運には及ばないので恥ずかしくなる。⑨心静かに風景をめでる楽しみは尽きず、世俗を離れた高尚な談論はいよいよ清らかになってゆく。⑩（このような）立派な宴席を設けて花に向かって座し、すずめが羽を広げた形の杯をやり取りして、月をながめては酒に酔う。⑪（このよい気分のときに、）立派な詩ができないならば、どうして風流の思いを述べることができようか（述べることなどできない）。⑫もしも詩ができなかったならば、罰は、昔の金谷園における罰杯の故事にならって、三杯の酒を飲ませることにしよう。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶範読に従って繰り返し音読する。
❷一文ずつ解釈していく。知技⑵ウ
❸四字句・六字句を摘出させ、その布置配列を検討し、それがどのような表現効果を見せているかを考える。思表判B⑴ア・ウ・エ〔**学習のポイント**1〕
❹「浮生若」夢」と断じた李白は、その悲しみを払拭するため、どのように対処しようとするのかを考える。

❶指導者の範読、指名読みを繰り返して、読めない漢字などを確認させる。また、音読によって文章のリズムを味わわせる。四六駢儷文の流麗なリズムは、もとより中国語音のリズムによって感得されるべきものであるが、字数を整えた句や対句がもたらす均整の美は、訓読による日本語のリズムにも反映している。
❷予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。
【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。以下、全ての詩に共通。
❸四六体の修辞について、その斉整美や音調美を、他の例をあげて補説する。
【評価】四六体の文体上の特色を理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。
❹快楽として、風景の美・肉親との歓談・美酒等と共に、詩作が挙げられていることに注意させる。

まとめ

学習活動のポイント

❶松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表する。知技⑵ア・イ、思表判B⑴エ　主態〔**「言語活動」1**〕

❶「言語活動の解答例」を参照。
【評価】本文と『おくのほそ道』の冒頭部分を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

●一六〇ページ

問 ◉**「浮生若レ夢。」（4行目）とは、どのような意味か。**

答 はかない人間の一生は夢のようである。「天地」の広大さと「光陰」の永遠に比べて、人間の存在のはかなさをいったもの。

補 「浮生」の語の持つはかなさ・定めなさは、「語句の研究」に示した「荘子」の例が参考になるほか、「浮雲」などの語が持つニュアンスからも窺える。

問 **「為レ歓幾何。」（4～5行目）とは、どのような意味か。**

答 喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。

補 「幾何」は物の数を問う疑問詞であるが、ここでは「どれほどもない。」の反語の用法であることに注意させる。

●一六一ページ

問 **「楽事」（一行目）とはどのようなものか、まとめてみよう。**

答 美しい景色をめでる喜び（幽賞）・身内の者たちとの世俗を離れた歓談（高談）・美酒（羽觴）・花・月・詩作（佳作）

補 後半の宴会の具体的展開の部分に着目させる。

語句の研究

●一六〇ページ

序 文体の一種。物事の次第を順序立てて述べる文。「叙」と同じ。ここは参会者の作った詩を集めた詩集の序文。先例として、西晋・石崇の「金谷園詩序」や東晋・王羲之の「蘭亭集序」などがある。なお、李白の本集では、題名を「春夜宴二従弟一桃李園一序」とする。

1夫 発語の辞。そもそも。いったいに。あらたまった口調で重々しく話題を提示する際に用いる。

1天地者万物之逆旅 「者」は、主語をはっきりと提示する働きをする助字。「逆旅」は、旅館。「逆」は迎えるの意。迎える意味のときは「ゲキ」と読む。「万物」は森羅万象をいう。天地は万物が仮に宿る旅館のようなものであるの意。天地は悠久にしてかつ広大で、天地間一切のものを包容するから、このようにいったのである。これは反面、悠久の天地に対し、万物は有為転変してやまないものであることもいっている。「荘子」知北遊編に「悲夫、世人直為二物逆旅一耳。」と、類似の表現が見える。この句は修辞法では隠喩法と呼ばれる。解釈するときには「…のごとし」のように直喩法に直すことが肝要である。なお、李白の本集では「逆旅」および次句の「過客」の下に「也」の字がある。

2光陰者百代之過客 「光陰」は、時間の流れ、年月。「光」は昼、「陰」は夜。「百代」は過去から未来への永遠の時。「過客」は過ぎ去る旅人。「百代之過客」で永遠の旅人。月日は未来永劫、刻々に流れ去るもので、これを例えていえば、ちょうど過去から未来へと永遠にわたって尽きることのない長い旅を続けてゆく旅人のようなものである、の意。

4浮生若レ夢 「浮生」は、水に浮かび漂うようなはかない人の一生。はかない人間の一生は夢のようである。人生を、水に漂うような定めなきものとする考え方は、すでに「荘子」刻意編に「其生若レ浮、其死若レ休。」と見えている。

4為レ歓幾何 喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。「幾何」は物の数をはかり問う疑問詞で、ここは反語の用法。

5古人秉レ燭夜遊、良有レ以也 「秉レ燭」は、

問　**「群季俊秀、皆為二恵連一。吾人詠歌、独慚二康楽一」（1～2行目）とあるのは、どのようなことをいったものか。**

答　一族の若者たちが謝恵連のように上手に詩を作るのに対し、年長の自分は謝霊運のように優れた詩ができないので恥ずかしい、と謙遜している。

補　一族の若者と自分との関係を、六朝時代の宋の詩人謝恵連とその族兄の謝霊運の関係になぞらえている点に注意させる。また「独慚二康楽一」が謙遜の表現であることにも注意させたい。

問　**「飛二羽觴一」（3行目）とは、どのような行為をいったものか。**

答　すずめが羽を広げた形の杯をさかんにやり取りすること。

補　「羽觴」とあるので、それにちなんで、「飛」といっている点に注意させる。

問　**李白のいう楽しみ・喜びとはどのようなものか、まとめよ。**

答　美しい景色をめでる喜び（幽賞）・身内の者たちとの世俗を離れた歓談（高談）・美酒（羽觴）・花・月・詩作（佳作）

補　後半の宴会の具体的展開の部分に着目させる。

ともしびを手に取って。古人が昼だけでは足らず、燭火をつけて夜までも遊んだのは、本当に理由のあることである。古人は誰を指すか分からないが、漢以前の人である。「文選」巻二十九の「古詩十九首」其十五に、「生年不レ満レ百、常懐二千歳憂一、昼短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一、為レ楽当レ及レ時、何能待二来茲一…」とあるのを踏まえるが、「文選」巻四十二にある魏の文帝（曹丕）の「与二呉質一書」に「古人思二秉レ燭夜遊一、良有レ以也。」とあるのをそのまま用いたようである。「良有レ以也」は、まことにもっともなことだの意。「以」は「由」の借字で、理由。

7陽春　うららかな春。春は陰陽二気のうち、陽の気が盛んであるから陽春という。

7召レ我以二煙景一　「煙景」は、かすみたなびく春景色。「煙」はかすみ、もや。陽春がかすみたなびく春景色を作って、我に来て遊べと招いている。

8大塊　大地、大自然の意、転じて万物の創造者。「荘子」大宗師編に、「大塊載レ我以レ形、労レ我以レ生、佚レ我以レ老、息レ我以レ死。」とあるのに基づく。

8仮レ我以二文章一　「文章」には、①美しい模様、②礼楽・制度などの国の文化、③詩文、あるいはそれを作る才能などの意味があるが、ここでは③。「仮」は貸し与えるの意。万物の創造者が我に文章を作る才能を貸し与え、詩文を作って楽しむように勧めている。一説に「文章」を天地自然の美景そのものを指すという。

●一六一ページ

1芳園　花が多くていい香りのする園。

1序二天倫之楽事一　「天倫之楽事」は、肉親の間の楽しみ。「序」は順序をたてる、繰り広げる。また、順序だててのべる。ここは後者の意味で解してもよい。「天倫」は、もと兄弟の意。「春秋穀梁伝」の隠公元年に「兄弟天倫也。」とあり、范寧の注に、「兄先弟後、天之倫次。」とある。しかしここでは必ずしも李白の兄弟のみではない。いずれも身内の者であるから、その中の年長者・年少者をもって兄弟に例えている。句の意は、兄弟のように親しい一族の者が集まって楽しい宴を開く。

1群季俊秀　大勢の優れた年少者たち。「群季」は、大勢の年少者たちを指す。「季」は、すえの意。「伯・仲・叔・季」の季である。「俊秀」は、優れた人物。ここでは

詩文の才能の優れた者をいう。「淮南子」泰俗訓に、「智過二万人一者謂二之英一、千人者謂二之俊一、百人者謂二之豪一、十人者謂二之傑一。」とある。

2皆為二恵連一　謝恵連のように、詩がうまい。これらの若い人々は皆有名な謝恵連のように詩が上手である。なお謝霊運を持ち出し、従弟たちを恵連に、自らを霊運に関係付け、李氏の一族を謝氏の一族に比較したところにこの文の妙味がある。「恵連」は謝恵連のこと。三九七年～四三三年。六朝時代の宋の詩人で、謝霊運の族弟（族兄弟は高祖、すなわち曽祖の父を同じくする者をいう）。族兄の霊運にその文才を認められた。伝は「宋書」巻五十三、「南史」巻十九に見える。

2吾人　わたし。普通、われわれの意であるが、ここでは李白自身のことをいっている。

2詠歌　詩歌。

2慚二康楽一　謝康楽に恥ずかしい。「康楽」は、六朝時代の宋の詩人謝霊運のこと。三八五年～四三三年。東晋の車騎将軍謝玄の孫で、祖父の封爵を継いで康楽公（後、侯に降格）と称したのでこのようにいう。少より学を好み、博く群書を読み、書画に巧みで、文章においては江左（江南）第一と称せられ、とりわけ自然の美景を描く山水詩に優れていた。「謝康楽集」八巻がある。伝は「宋書」巻六十七、「南史」巻十九に見える。ここでは、その謝霊運のような優れた詩ができないので恥ずかしいと謙遜して言ったもの。

2幽賞　心静かに風景をめでる。

3高談　世俗を離れた高尚な談論。

3転清　「転」は、いよいよ、ますますの意。世俗の名利を脱した高尚な話が、ますます清らかにすすめられる。

3瓊筵　玉を編んで作ったような美しいむしろ。立派な宴席の例え。「瓊」は玉で、花に対していう。

3坐レ華　花に対して座る。花の眺めの良い所に美しい宴席を開いて座る。

3飛二羽觴一而酔レ月　「羽觴」はすずめが羽を広げた形の杯。一に爵といい、すずめに象り羽翼の形を付けた杯。「楚辞」宋玉の招魂に「実二羽觴一」とあり、朱子注に、「羽觴飲酒之器、為二生爵形一似レ有二頭尾羽翼一也。」とある。一般に杯の両側に羽形の耳を付け、取っ手としたものを羽觴と呼んでいる。「飛」は羽觴にちなんでいう。杯をさすこと。句の意は、互いに杯をやり取して月を賞しながら酔う。

4佳作　よい作品。本集には「作」を「詠」に作る。

4何伸二雅懐一　「何……」は反語形。「雅懐」は風雅な思い。世俗を忘れた高尚な心情。句意は、どうして風流な思いを述べることができようか、できないであろう。

4如　「若」と同じく仮定の意を表す。

4金谷酒数　晋の石崇が、別荘の金谷園で大宴会を開き、詩のできない者に罰杯として三杯飲ませたという故事。本集には「酒」の下に「斗」の字がある。「金谷」は園名。当時の河陽、現在の河南省洛陽市の北西にあった。石崇の本伝は「晋書」巻三十三、石苞の伝についている。

句法

為レ歓幾何。　反語形。「……幾何（ハ　ノ）」のように、「幾何」の二字が句末に置かれているときは、数量の僅少を意味する。例えば「人生幾何（ノ）」の場合は、「人の生涯は、さて何年生きられるであろうか、それはきわめて短い。」の意。

況陽春召レ我以二煙景一、大塊仮レ我以二文章一。　抑揚形。「いはンヤ……ヲヤ」と呼応して読み、「ましてや……はなおさらだ」の意。

独慚二康楽一。　限定形。「独（リ）……」の形で、「ひとリ……」と読み、「ただ……」の意。意味のうえでは「独吾人詠歌（リ　ノ　ハ）」であるが、ここでは「皆為（リ）二恵連一」と対にするために語順を変えている。

何伸二雅懐一。　反語形。「何（ノ）……（ン）」の形で、「なんゾ……ン」と読み、「どうして……だろうか、いや、……ない。」の意。

如詩不レ成　仮定形。「如（シ）……（バ）」の形で、「もシ……バ」と読み、「もし……ならば」の意。

鑑賞

天地という広大な空間、光陰という永遠の時間に対して、人間の一生はあまりにはかなく短い。しかし、李白はその人生有限の悲しみを嘆くことにのみ終始するのではなく、逆にそれをバネに人生を燃焼させるべく快楽の追求に向かう。その快楽とは、桃李の咲きにおう庭園での、親しい身内の者たちとの酒宴であった。

かくて文章の後半では、楽しい宴席のさまが述べられる。「幽賞」「高談」の尽きせぬ興趣、花と月を賞でて美酒に酔う快楽に続けて、最後に詩作の楽しみがあげられているのは、夜宴に集った人々の作品を集めた詩集の序文として書かれたものであったからにほかならない。先例として、西晋の石崇「金谷詩序」、東晋の王羲之「蘭亭序」があり、日本では元号「令和」の典拠となった「梅花歌序」（『万葉集』）も同じジャンルに属する。

この文章は、快楽を求める所以から筆を起こし、酒宴の様子を叙して最後は詩の競作の楽しみを述べて一編を結ぶ。桃李の花咲きほこる庭園での楽しい宴会の次第を、華麗な筆致で描き尽くして間然するところがない。内容と表現がみごとに一致した、四六駢儷文の名品である。

参考

Ⅰ　四六駢儷文について

四六駢儷文の特色は、およそ次の五点にまとめられる。

(1)　四字句・六字句を基調とする。

(2)　対句を多用する。

（而）浮生若夢、為歓幾何。　古人秉燭夜遊、良有以也。

（夫）天地者万物之逆旅」直対
　光陰者百代之過客」
　群季俊秀、皆為恵連」隔句対
　吾人詠歌、独慚康楽」

（況）陽春召我以煙景」直対
　大塊仮我以文章」

会桃李之芳園」直対
序天倫之楽事」直対
幽賞未已」直対
高談転清」直対
開瓊筵以坐華」直対
飛羽觴而酔月」直対
不有佳作
何伸雅懐」直対

(3) 故事・典故を多用する。
古人秉燭夜遊、良有以也。→「古詩十九首」其十五
罰依金谷酒数。→西晋・石崇の金谷園での故事。

(4) 音声の調和

(5) 修辞の美の追求
芳園・瓊筵・雅懐

Ⅱ『おくのほそ道』冒頭部分

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に掛け置く。

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵より集ひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

［現代語訳］

月日は永遠の旅人（のようなもの）であって、来ては去り去っては来る年もまた旅人（のようなもの）である。舟の上で一生を送ったり、馬のくつわを取って老年を迎えたりする者（船頭や馬子など）は、その日その日が旅であって、旅（そのもの）を自分の栖としている。昔の（風雅を愛した）人（の中に）もたくさん旅で死んだ人がいる。自分も、いつの年からか、ちぎれ雲が風に誘われて（漂うようにしているのを見て、旅に）出てさまよい歩きたいという気持ちがしきりに起こって、（最近も須磨・明石などの）海辺を旅し、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に（帰り、）蜘蛛の古巣を払いのけて（落ち着き）、そのうち年も暮れ、春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと、そぞろ神が取りついて心を物狂おしくさせ、（また、）道祖神の招きにもあって落ち着かず、ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据える（など旅支度にかかる）とすぐに、松島の月のことが何よりも第一に気にかかって、（これまで）住んで

いた庵は人に譲り、（とりあえず）杉風の別宅に移るときに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

（この句を発句とする）表八句を草庵の柱に掛けて置いた。

三月も（押し詰まった）二十七日、明け方の空がおぼろに霞み、月は有明の月で光がもう薄くなっているものの、（遠くには）富士の峰がかすかに見えて、（近くには）上野、谷中の桜の梢（が見えるが、それ）を、またいつ（見ることができる）かと心細い。親しい人々は残らず前の晩から集まって、舟に（一緒に）乗って送ってくれる。千住という所で舟を上がると、前途三千里の（長旅への）思いに胸がいっぱいになって、夢幻のごとき（この世の中で、会うも別れも不定であるが、それでも親しい人々と別れる分かれ道となった千住の）町で、惜別の涙を流すのだった。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

この句を旅日記の初めとして（出発したのだが）、行く道はなかなか進まない。人々は途中に立ち並んで、（私の）後ろ姿の見える限りは（見送ろう）と見送っている様子である。